

琉球大学学術リポジトリ

今日の若者の能力主義をめぐる意識の把握に向けて：
前提作業としての2000
年代高校生意識調査データの再分析

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2021-04-22 キーワード (Ja): 能力主義, 承認, 存在肯定, 反貧困, コンサマトリー, 幸福感 キーワード (En): 作成者: 長谷川, 裕, Hasegawa, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48330

今日の若者の能力主義をめぐる意識の把握に向けて ——前提作業としての 2000 年代高校生意識調査データの再分析——

Towards understanding the attitude about meritocracy of today's young people: a reanalysis of high school students' attitude survey in 2000's as a prerequisite work

長谷川 裕
Yutaka Hasegawa

能力主義は、能力・努力に基づく業績に応じて地位・報酬を配分することを、またそうした能力・努力に基づく業績を基準に人の価値を判断することを是とする考え方である。それは、近現代社会の、地位・報酬に関わる点での社会構成原理＝正統化原理であるとともに、人間観・人生観をも含む人びとの価値意識でもある。本稿は、こうした能力主義を肯定する意識を現代日本の若者がどの程度もっており、かれらの様々な意識や行動全体の中でそれがどのような位置を占めているか、またそれがどのような変化の傾向性を孕んでいるかを把握することを目的とした調査研究の一環として、筆者が 2007 年に行った高校生対象の意識調査のデータに対して、上記の目的の視点から再分析を試みるものである。

キーワード：能力主義 承認 存在肯定 反貧困 コンサマトリー 幸福感

1 課題

本稿は、科研費による研究「子ども・若者の能力主義・競争意識についての経年比較調査研究」（2019-2021 年度、基盤研究 (C) (一般)、研究代表者：長谷川裕、課題番号：19K02565）の作業の一部である。

上記の研究は、近現代社会の構成原理の 1 つである能力主義原理とそれに

伴う競争の社会過程を基本的に是認する意識（上記研究科題名にある「能力主義・競争意識」）が、特に今日の日本の子ども・若者においては、どの程度見られるか、かれらの様々な意識や行動との間に規定・被規定の関係を持ちつつそれらの全体の中にどのような位置を占めながら存在しているか、またその能力主義・競争意識がどのような変化の傾向性を孕みながら存在しているかを把握することを目的としている。その研究の主要な作業は、2000年代に実施され筆者が携わった学齢期の子ども・若者対象の2つの質問紙調査（2002年末-2003年初に全国13地域で小・中・高校生を対象として実施された質問紙調査及び2007年6-9月にランダムに選んだ高校の生徒対象の質問紙調査）の結果との経年比較が可能な形で、新たに子ども・若者対象の質問紙調査を設計し実施することである。本稿の課題は、経年比較の対象となる上記の2つの質問紙調査のうち後者（詳細は後述）のデータを、2で述べるような筆者にとっては新たな視点から再分析し、今後実施予定の質問紙調査の分析の枠組みを練り上げるための準備作業の一環とすることである。

2 視点

本稿において過去の質問紙調査のデータを再分析する際の視点とは、次のようなものである。

2.1 能力主義意識

能力主義とは、社会構成員への社会的地位及びそれに付随する報酬の、差異を伴う配分とその正統化の基準・根拠を、各人が達成した業績とその裏づけと見なされる能力とに据えるものである。一般に能力主義を配分原理とした場合、高い地位や報酬を望む者たちの間に（あるいは低い地位・報酬を忌避したい者たちの間に）、自らの業績と能力を高め他者を上回ろうとする動機づけがなされ競争の社会過程が展開する。そのことによって、地位と報酬の差別的配分は、各人自らの業績と能力による互いの間の競争の結果である

として正統化がされ、既存の社会秩序の統合へとつながる。このように能力主義は、特に社会的地位・報酬に関わる点での社会構成原理＝正統化原理である。ただし、歴史的に普遍的なものではなく、近現代社会の社会構成原理である。

それとともに、能力主義は、それを正統視する人びとの意識のあり方でもある。特に能力主義が人びとの意識であるという点を勘案すると、その中身は、社会学者の立岩による次のような議論が、その要点を的確におさえるものとなっていると思われる。

立岩(1997=2013)によれば、近代社会は基本的に、ロックの思想などに典型的に表れているように、自分で生み出したものやそこから派生する利益はその人が取得できる、そのように何かを生み出すことができることがその人の価値を表しているという考え方に基づいて営まれているという。能力主義とは、この考え方から派生する、あるいはこの考え方そのものである。

その能力主義には、立岩(2003)は次のような3つの「意味」があるという。すなわち、①「財の配分原理としての能力主義」、②「人の価値に関わるものとしての能力主義」、③「適材適所」という意味での能力主義、である。①の意味での能力主義は、何かを生産した人が、それを生産したということに応じて利益を取得できるのであり、したがってより能力がありより多く生産できる人がそれに応じて多くの利益を取得できるのは正当であるという論理である。②の能力主義は、どのような能力がありそれを発揮して何を成し遂げたかによってその人の価値が決まるのは正当であるという論理である。③の能力主義は、ある仕事は、それをすることができる能力を他の人以上にもっている人にさせるべきであるという論理である。それは、“地位の配分原理としての能力主義”と言ってもいいだろう。

2.1 冒頭での能力主義についての説明の仕方に基づけば、それが③の地位配分原理であることこそが重要であるということになるかもしれない。だが立岩は、能力主義の性格として、むしろ①の財の配分原理や②の人の価値に

関する基準であることのほうを重視していると読める。それは、前々段落で述べたような近代社会の性格を①や②は表現しているゆえそれらのほうがより根底にあり、そこから③が派生すると見ているからだと推測する。立岩によるこうした能力主義把握に沿って考えるならば、能力主義とは、どのような人間が、あるいはどのような生き方が望ましいのかという人間観、人生観にも関わる1つの社会意識であるということになるだろう。

能力主義をこのようにおさえた上で、それを若者はどの程度肯定しているのか、またその肯定の程度は、既存の社会秩序のかれらの正統視、既存の社会秩序へのかれらの統合にどのぐらいつながっているものなのかを捉えたい。

2.2 自己承認

能力主義は、近現代社会において人びとが他者から承認を受け、それに基づいて自分自身を承認できるかどうかをめぐる重要な原理・基準の1つとなっている。能力主義は、何よりそのように承認に関わることがらであるがゆえに（つまり、それが地位や報酬の配分原理であり、したがって自分たちの利益に関わってくるということ以上に）、人間が日々を生きる上でも重要なものとして人びとの間に浸透しているものと推測する。

この推測は、社会哲学者のホネットの以下のような承認をめぐる議論に依拠してのことである。ホネット(2010 = 2017:120-121)は、承認とは次のようなものであると言う。

- ①個人や集団の積極的な特性を肯定することである
 - ②行為としての性格を帯びる、つまり言葉によって表現されるだけでなく、振舞い方や態度となって表れる
 - ③他の行為の副産物としてではなく、それ独自の意図をもってなされる
 - ④様々な類型として表れる
- ①～③は、人間社会に一般に見られる、承認なるものの普遍的性質と考え

ていだろう。その上で、そうした普遍的性質を帯びた承認が、④で言われているように、その時・その場に応じて様々な形をとって表れるということである。

ホネット(1992=2003, 2000=2005)は、近現代社会では、承認の原理が基本的に3つに分化し、それに対応して承認の行為・関係に3つの類型が見られる旨を主張する。その3つとは次のようになる。

(a) 家族、恋人、友人などの親密な関係性が他の社会関係からそれとして分化し生活の中で重要なものとして位置づけられるようになる中で、その関係性において他ならぬその人として承認される「愛」という類型

(b) すべての人間が法的な裏づけを伴いつつその尊厳・人権を承認される「法（権利）」という類型

(c) その人の能力とそれに基づく業績によってその社会的貢献が測られ、それらの内容や程度に応じて承認される「価値評価」という類型

(c)は言うまでもなく、能力主義原理に基づく承認である。つまり能力主義は、近現代の社会において、人が承認される、あるいはされないが決まってくる重要な基準の1つなのである。

ホネットは、一般に人間にとって、他者から承認を得られるかどうかは生きる上できわめて切実なことがらとして体験されるものであることを強調する。その理由は何よりも、他者から承認されるかどうかは、自分が自分のことを承認できるかどうかを大きく左右するからであると考えていだろう(ホネット 2000=2005: 196-197)。そうした自己承認は、言うまでもないだろうが、自分自身に対する肯定的な意識となって表れる。

したがって、その人が他者から承認されていると意識しているかどうか、また自分自身のことを承認しているかどうかは、その人が自分自身のことを肯定に見ることができているかどうかとなって表れるだろう。そのように考えて、若者の自己への肯定的意識はどうなっているかを掴み、その上で、その自己への肯定的意識と能力主義への肯定との関連がどうなっているかを掴

みたい。前述のように今日の社会において承認原理は能力主義だけではないが、自分が他者から承認されていると感じられ、その承認が能力主義原理に基づくものであると感じられるならば、能力主義という承認原理に対しても肯定的な見方をもつことになるであろうと推測されるからである。

2.3 存在肯定意識、反貧困・反格差意識

能力主義は、2.1 で見たように、能力と業績によって人間の価値を序列づけ、能力と業績による資源の差異化された配分を肯定するものであるから、社会の構成原理としてそのことのみが純化された形で貫かれるならば、それは、人間が存在していること自体を無条件に肯定しようというような考え方と相反し、また上記の配分原理に基づいている限り、必要な資源が配分されず貧困状態に陥る人がいたとしてもそのことの重大性が看過されることにつながるであろう。逆に見れば、人間の存在を無条件に肯定すべきであると考え、そのことを脅かす貧困や格差を望ましくないものと考えたとすれば、能力主義を手放しでは肯定できなくなるであろう。

そこで、能力主義を肯定する意識と、人間の存在を無条件に肯定する存在肯定意識や、貧困や格差を望ましくないものとして否定する反貧困・反格差意識との関連を検証したい。

2.4 コンサマトリー意識、幸福感

今日とりわけ若者のあいだに、「コンサマトリー化」という価値観・生き方の変化の趨勢が見られるとの指摘がある。「コンサマトリー」とは、未来における目標実現のために邁進するのではなく、今現在に関心を焦点化しそれが満ち足りることを重視する価値志向を表す言葉である。社会哲学者の豊泉(2010, 2016a, 2016b)は、そうした価値志向が若者のあいだに浸透することで、かれらは、自身の生活を肯定的に受けとめる傾向を強め、その結果、各種調査でも明らかになっているように、特に2000年代になって以降生活

満足度・幸福感を高めていると、さらに、こうした変化の重要な一要因に、1990年代半ば以降の日本社会の変動—格差・貧困の拡大が露わになるような変動—により「能力主義の虚構」が露呈し、能力主義に支配されない生き方へとかれらが「ヴィジョン」を変化させようとしているという見解を提示している。つまり、コンサマトリー化とは、かれらの日々の生き方の変化であるとともに、能力主義をはじめとする現状の社会の支配・統合原理への若者の批判意識の高まりを表すものでもあるということである。

豊泉の見解は、コンサマトリー意識を、今日の若者が困難な社会状況の中でもつに至った、その状況を生きやすいものに変換するための、そしてその一環として能力主義に対する批判的なスタンスを伴う、いわばかれらの自前の時代との向き合い方として捉えていると言っているであろう。その意味で、とても興味深い見解であると思える。筆者自身も、長谷川（2017、2020）でそうした豊泉の見解に論及し、特に長谷川（2017）では、その見解を肯定する趣旨の論を展開した。

ただそれは、豊泉にしても筆者にしても、精密な形でデータに基づく議論ではなかった。そこで、能力主義意識、コンサマトリー意識、幸福感の関連がどのようになっているかを検証してみたい。

2.5 状況・環境

以上の意識のもち方が、その人がおかれている状況・環境によってどのように左右されるかも検討の必要がある論点であろう。その状況・環境とは、多様な要素から構成されているものであり、それらを過不足なく取り上げることはできない。実施済みの調査の質問紙に盛り込まれた質問項目の制約がある中で、それらのうち何を取り上げることができるかは、3で説明する。

3 調査より

3では、2で述べた視点に基づいて調査データによって若者の意識を分析

する。若者の意識の諸相のうち取り上げるのは、2で述べたことより、能力主義意識、自己承認意識、人間の存在自体を肯定する意識やそのことを脅かす貧困や格差に反対する意識、コンサマトリー意識、幸福感である。加えて、それらを規定する状況・環境要因のうちのいくつかも分析の対象とする。

3.1 調査概要

使用するデータは、筆者が代表者として単独で取り組んだ科研費による研究「教育における能力主義の原理と新自由主義時代におけるその実態理論的及び実証的研究」(2005年度-2007年度、基盤研究(C)、課題番号17530616)の主要な作業として行った、高校生対象の意識調査によって得られたものである。この調査は、全国の全日制高等学校からランダムに50校を抽出して調査依頼を行い、協力を得られた34校の第2学年の生徒を対象として実施した。調査協力校には、第2学年の2学級を任意に選んでもらい、選ばれた学級のすべての生徒を調査対象とし、2475人から有効回答を得た。調査対象となった学級の全在籍者数2588人を分母とすると、有効回答率は95.6%である。以上についての詳細及び調査結果は、上記研究の報告書・長谷川(2008)に記されている。

3.2 変数の説明

3.1で示した調査は、その研究課題名に示されているように、若者の能力主義意識を捉えることが重要な目的の1つであったが、ただ2で述べたような視点をもって行われたものではない。したがって、その調査で使用した質問紙には、その視点に適切に対応するものが十分に掲載されているとは言えない。その制約の中で、3冒頭で確認した分析対象となる諸事項を捉えるための変数は、以下のようになる。

3.2.1 能力主義意識

2でも述べたように、能力主義は近現代社会の構成原理の1つであり、人びとの人間観・人生観を含む社会意識ともなって表れる。本調査では、「自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ」「自分の能力を発揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ」という2つの質問（それぞれ、2.1で見た立岩（1997=2013）のいう「財の配分原理としての能力主義」、「人の価値に関わるものとしての能力主義」を意味する）によって、高校生の能力主義への高低の度合いを測ろうとした。

使用した調査票には、社会観・社会規範意識としてカテゴライズできる20の質問項目を挙げたが、上記の能力主義に関わる2項目もそれらに含まれる。図1は、これら20項目の度数分布を図示したものである。質問項目は、各回答者の回答を「とてもそう思う」4点～「全くそう思わない」1点として、各項目の回答の平均点数を算出し、それを基準に降順に並んでいる。

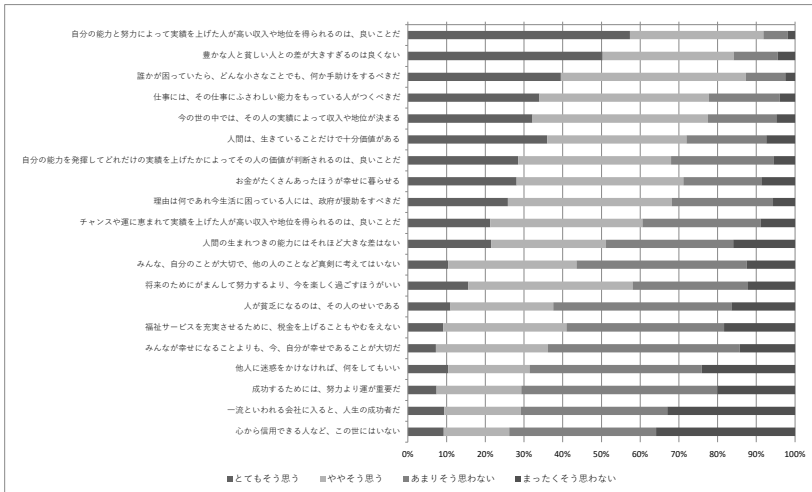


図1 社会観・社会規範意識 度数分布

この図に示されているように、「自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ」は20項目の中では最も肯定的回答の割合が高くなっている。また「自分の能力を發揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ」は、20項目中第7位である。もちろんこれら20項目だけで人びとの社会意識の多様な側面を網羅できるものではないが、それでも、能力主義肯定の意識は、調査対象の高校生の間でかなり強く見られるものであると判断しても間違いはあるまい。

これら2項目への回答に対して主成分分析を行った。その結果が表1に示されている。抽出された成分は能力主義肯定の程度を示すものということになり、これを、能力主義意識を示す変数として用いる。

表1 能力主義意識 主成分分析

	能力主義意識成分
自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ	0.814
自分の能力を發揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ	0.814
成分寄与率（抽出後）%	66.3

3.2.2 自己承認

図2は、質問紙にある、自己意識・対他関係意識とカテゴライズできると考えた30項目について、図1と同様の方法で並べてそれらの度数分布を図示したものである。そこに挙がっているように、質問紙には、回答者が自分自身をどう受けとめているかに直接関連する質問として、「私は他の人に比べてすぐれているところがある」「自分が好きである」「私は自分らしく生きていると思う」「今のままの自分でよいと感じている」の4項目が盛り込まれている。いずれも自己承認に伴う、自己に対する肯定的な意識の程度を問う質問と見ることができるだろう。

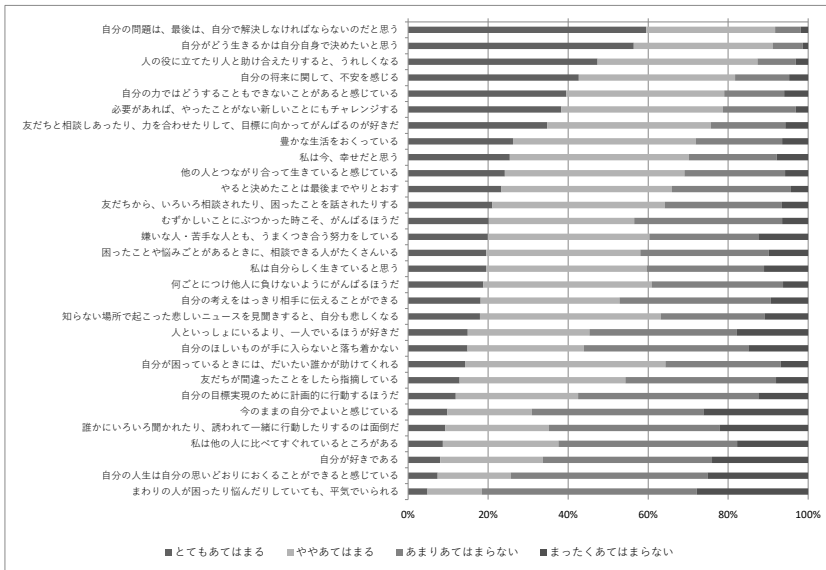


図2 自己意識・対他関係意識 度数分布

筆者は、心理学者・カウンセラーである高垣の議論を参考にして、自己承認及び自己に対する肯定的な意識には、大まかに捉えると二側面があると想定し、以下の分析を進めようと考えている。その二側面のうちの一方は、すぐあとで述べるように高垣が独特の意味を込めて「自己肯定感」という言葉で表現しているものであり、もう一方は高垣が文脈に応じて「セルフ・エスティーム」または「自己愛」という言葉を主に用いて言い表そうとしている側面である（以下では、「セルフ・エスティーム」で代表させる）。

高垣(2015)によれば、後者のセルフ・エスティームは、『『こうありたい』とか『こうあらねばならない』という基準』に照らして自身がその基準を「クリアしている」(ibid.: 16)と感じられる時に抱く感覚、「自分の所有する特性・性能によって自分を愛する」(ibid.: 89)感覚であり、どういう「特性・性能」をどの程度有していればいいのかという基準は、「自分が設けた価値基準」

(ibid.: 49)である場合もあるが、他人の評価に依存して設定される場合もある。このように、一定の基準に照らして自己の能力・特性・属性などを、しばしば他者との相対比較を伴いながら、自己評価することを通じて得られた、自己を肯定する感覚がセルフ・エスティームである。

これに対して前者の「自己肯定感」は、「自分が自分であって大丈夫」という感覚であると高垣は言う。これは高垣独特の言い回しであり、「ダメなところをいっぱいかえる自分であっても、あえてそういう自分をゆるし、自分を“大丈夫、かまへんよ”と認めてやる」という感覚 (ibid.: 9)、「自己の存在そのものを肯定する」感覚であり「部分的な能力や特性を測るものによって育てられたり、傷つけられたりするものでは、そもそもない」(ibid.: 14) 感覚であるという。つまり、能力・特性・属性などのパーツではなく、「自己の存在そのものを肯定する」(ibid.)、「存在レベルで自分を肯定する」(ibid.: 39) 感覚だということである。

自己肯定の意

表2 自己承認 因子分析

意識にこのような二面性があると		自己承認第1因子: 自己肯定感	自己承認第2因子: セルフ・エスティーム
いう捉え方に依	今のままの自分でよいと感じている	0.752	-0.116
拠して、前述の	私は自分らしく生きていると思う	0.602	0.136
4項目への回答	私は他の人に比べてすぐれているところがある	-0.123	0.751
に対して、因子	自分が好きである	0.214	0.609
	因子寄与率 (抽出後) %	42.5	7.5

数を2に設定して因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行ってみた。その結果が、表2である。各因子への因子負荷量の大きい質問項目の質問内容からそれらが意味するところを推測すると、それは、第1因子は高垣のいう自己肯定感、第2因子は同じくセルフ・エスティームであると見ていだろうと考えた。そこで、各因子の名前もそのように名付けた。

ただし、両因子の相関係数は0.838とかなり大きく (後掲の表7に示されている)、また両因子の因子寄与率の差異も表2に示されているようにな

り大きく、自己承認に伴う自己への肯定的意識の二側面の様態がこの因子分析の結果によってうまく捉えられているかどうかは検討の余地があるであろう。だが、今回はこれらを用いて分析を進め、その妥当性に関しては、その結果を踏まえてあとで改めて触れることとしたい。

3.2.3 存在肯定意識、反貧困・反格差意識

2.3 で見た人間の存在自体を無条件肯定する存在肯定意識については、その強弱の程度は、社会観・社会規範意識質問群の一項目「人間は、生きていることだけで十分価値がある」への回答（図 1 参照）によって測定する。

また、同じく 2.3 で見た人間の存在を脅かす貧困や格差を望ましくないものとして否定する反貧困・

表 3 反貧困・反格差意識 主成分分析

反貧困・反格差意識質問群に配置された関連するいくつかの質問項目への回答を元にした合成変数によって測定しようと考え、表 3 に示す	反貧困・反格差意識成分
反格差意識は、やはり社会観・社会規範意識質問群に配置された関連するいくつかの質問項目への回答を元にした合成変数によって測定しようと考え、表 3 に示す	
豊かな人と貧しい人との差が大きすぎるのは良くない	0.797
理由は何であれ今生活に困っている人には、政府が援助をすべきだ	0.759
人が貧乏になるのは、その人のせいである	-0.475
成分寄与率（抽出後）%	47.9

す主成分分析によって抽出された成分を用いることにした。

3.2.4 コンサマトリー意識、幸福感

2.4 で見たコンサマトリー意識は、社会観・社会規範意識に関する質問の 1 つとして位置づけたものに、「将来のためにがまんして努力するより、今を楽しく過ごすほうがいい」という、まさにコンサマトリー意識について尋ねるものであると考えられる質問がある（図 1 参照）ので、それへの回答によって測定する。

また、同じく 2.4 で触れた幸福感は、自己意識・対他関係意識質問群 30 項目の中の 1 項目「私は今、幸せだと思う」（図 2 参照）への回答によって

測定する。

3.2.5 状況・環境

2.5 で触れた回答者を取り巻く状況・環境としては、回答者が通う学校、回答者の家族、回答者が取り結ぶ関係性を取り上げ、使用する質問紙の質問への回答によって把握可能な、それら各々の以下のような側面について測定する。

(1) 学校ランク

調査対象となった学級が属する学科等を、入学における偏差値、四年制大学進学率を基準に5つの「ランク」に分けた。学校については、このランクに着目する。なお、ランクごとの回答者数の度数分布は、表4のとおりである（ランクの数値が大きいほど、上記の基準に照らして高ランクであることを意味する）。

表4 学校ランク別生徒数

ランク	度数	割合 (%)
1	473	19.1
2	478	19.3
3	508	20.5
4	468	18.9
5	548	22.1
合計	2475	100.0

(2) 家族文化資本

質問紙には、家族の文化資本を測定するための10項目の質問が設けられている。

本来ならば回答者の家族の

表5 家族文化資本 主成分分析

親の職業や収入を尋ねて回答者の属する社会階層を捉えたいのだが、調査協力を依頼する学校にそうした質問への抵抗感が生じ協力が得られない危険性が小さくないので、それに代替するものとして、他の調査研究の質問に倣って「家の人が	家族文化資本成分
家の人が博物館や美術館に連れて行ってくれる	0.663
小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった	0.643
家の人とよく政治や社会問題について話し合う	0.607
家の人が手作りでお菓子をつくってくれる	0.598
小学校の低学年の時に、家の人が勉強や宿題をみてくれた	0.584
家には文学作品や詩集、絵画などがある	0.536
今でも、家の人が勉強や宿題をみてくれる	0.528
家の人はテレビでニュース番組を見る	0.428
成分寄与率（抽出後）%	33.4

博物館や美術館に連れて行ってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「小学校の低学年の時に、家の人勉強や宿題をみてくれた」等、家族の文化資本を尋ねる質問項目を設けた。それらの項目への回答に対して成分数1に設定して主成分分析を行い、共通性の大きさを考慮し2項目を外し、結果として表5にあるように家族文化資本成分が抽出された。家族については、この家族文化資本成分によって測定される、回答者の家族の家族文化資本の多寡に着目する。

(3) ケア的な関係性

回答者が他者との間にどのような関係性を取り結んでいるかも、回答者を取り巻く状況・環境の重要な一側面であると考え、自

表6 ケア的な関係性 因子分析

	ケア的な関係性因子
己意識・対他関係意識質問	0.733
群の質問のうち他者との間に相互に支え合う関係性を	0.704
取り結んでいるかどうかに関わる質問に着目し、それらの回答に対して因子分析	0.605
	0.520
	41.7

(最尤法、プロマックス回転)を行い、表6のような結果を得た。抽出された因子は、他者との間に相互に困難を支え合い、つながり合っていることを感じられる関係性を取り結んでいる程度を示すものであり、「ケア的な関係性」因子と名づけた。

3.3 分析

3.2 で示した諸変数の分析の方法、及びその結果について述べていく。

3.3.1 集計

以下の分析のための主として参照するのは、表7及び表8として集計されたデータである。

表7は、3.2 で見た10変数間の相関分析の結果を示したものである。*は5%水準で、**は1%水準で統計的に有意であることを、太字は相関係数の値の絶対値が0.2以上であることを、太字・網掛けは同じく0.4以上であることを示している。これらは、表8でも同様である。

表7 主要諸変数間相関分析

	能力主義意識	自己承認①自己肯定感	自己承認②セルフ・エスティーム	存在肯定意識	反貧困・反格差意識	コンサマトリー意識	幸福感	学校ランク	家族文化資本	ケア的な関係性
能力主義意識		0.072**	0.119**	0.050*	-0.050*	0.010	0.073**	0.114**	0.066**	0.095**
自己承認①自己肯定感	0.072**		0.838**	0.159**	0.023	0.026	0.436**	0.061**	0.193**	0.309**
自己承認②セルフ・エスティーム	0.119**	0.838**		0.138**	-0.009	-0.070**	0.456**	0.128**	0.243**	0.326**
存在肯定意識	0.050*	0.159**	0.138**		0.313**	0.027	0.250**	-0.087**	0.160**	0.283**
反貧困・反格差意識	-0.050*	0.023	-0.009	0.313**		0.046*	0.071**	-0.102**	0.107**	0.167**
コンサマトリー意識	0.010	0.026	-0.070**	0.027	0.046*		-0.077**	-0.130**	-0.122**	-0.012
幸福感	0.073**	0.436**	0.456**	0.250**	0.071**	-0.077**		0.113**	0.278**	0.467**
学校ランク	0.114**	0.061**	0.128**	-0.087**	-0.102**	-0.130**	0.113**		0.223**	0.020
家族文化資本	0.066**	0.193**	0.243**	0.160**	0.107**	-0.122**	0.278**	0.223**		0.332**
ケア的な関係性	0.095**	0.309**	0.326**	0.283**	0.167**	-0.012	0.467**	0.020	0.332**	

表8は、それら10変数各々と質問紙に盛り込まれた質問への回答との間の相関分析の結果を示している。後者は、質問紙の質問項目のうち回答選択肢が評定尺度となっているものすべてである。これを読む上でのいくつかの注意事項を。

- i) いずれの質問項目についても、そこに示されていることへの肯定度合いが強いことと10変数各々との相関係数が示されている。
- ii) 「学業成績へのコミットメント」として分類した「あなたは学校の勉強がどのくらい得意ですか」は、それへの回答選択肢「まったく得意でない」、「あまり得意でない」「ふつう」「やや得意」「とても得意」それぞれを1点～5点として計算した。
- iii) 同じく「あなたは、中間・期末テストにむけて、ふつうはどれくらいを目標として勉強していますか」は、回答選択肢「どんな成績でもか

まわらない」「落第点でなければいい」「平均点くらいがとれればいい」「少しでも成績上位を目指す」それぞれを1点～4点として計算した。

iv)人生観質問群は、そこに挙がっている各々について「自分の人生で重要なこと」と思う程度を四段階で尋ねそれぞれ1点～4点として計算した。

表8 相関分析

質問項目		能力主義観	自己承認① 自己肯定感	自己承認② セルフ・エスティーム	存在肯定感	反集団・反帰 念意識	コンサマト 意識	幸福感	学校ランク	家族文化資 源	ケアの文化的 関係性
学校体 験	学校に行くのが楽しみだ	0.045*	0.319**	0.354**	0.187**	0.088**	-0.108**	0.468**	0.162**	0.334**	0.807**
	学校の勉強はおもしろい	0.053**	0.360**	0.304**	0.084**	0.007	-0.235**	0.379**	0.306**	0.388**	0.156**
	学校の勉強はよくわかる	0.104**	0.337**	0.378**	0.041**	-0.028	-0.178**	0.238**	0.135**	0.187**	0.140**
	私の気持ちをよくわかってくれる先生がいる	0.048*	0.387**	0.397**	0.138**	0.070**	-0.081**	0.307**	0.131**	0.384**	0.595**
	学校はいろんなきまりがきつしい	0.010	-0.001	-0.010	0.044*	0.069**	0.088**	-0.036	-0.140**	-0.021	0.130**
高校に ついて の主観 的レバ ランス	今のクラスにはとめない	0.017	-0.157**	-0.139**	-0.069**	0.000	0.016	-0.206**	0.030	-0.007	-0.153**
	学校でいろいろな場面で、「できる・できない」とか「良い・悪い」とかあった 評価の目を向けられる	0.123**	-0.016	0.024	0.036	0.040*	0.018	-0.010	0.035	0.055**	0.050*
	社会生活を送っていく上で必要なスキル・サーも学ぶところ	0.114**	0.098**	0.113**	0.324**	0.130**	-0.128**	0.177**	-0.028	0.191**	0.188**
	自分の進路について深く考える機会が得られるところ	0.101**	0.138**	0.147**	0.252**	0.128**	-0.108**	0.184**	-0.013	0.180**	0.179**
	社会の中の種類々な職業について学ぶ機会が得られるところ	0.152**	0.135**	0.161**	0.198**	0.116**	-0.120**	0.210**	0.061**	0.185**	0.238**
	将来つきたい職業と深く結びついた内容を学ぶところ	0.078**	0.143**	0.136**	0.218**	0.105**	-0.050**	0.175**	-0.111**	0.114**	0.230**
	就職・進学によって有益な情報やサポートが得られるところ	0.030	0.139**	0.110**	0.177**	0.087**	-0.039	0.137**	-0.183**	0.062**	0.179**
	進学・就職・資格などの試験に合格するために必要な勉強をすること	0.132**	0.145**	0.139**	0.303**	0.117**	-0.065**	0.218**	0.075**	0.143**	0.219**
	他の人と協同してのものを行動力をつけること	0.162**	0.101**	0.120**	0.125**	0.055**	-0.086**	0.168**	-0.009	0.097**	0.166**
	上記とは直接関係のないが、興味深い内容について学ぶところ	0.079**	0.142**	0.163**	0.254**	0.190**	-0.037	0.268**	0.035	0.231**	0.266**
	自信や自己肯定感を与えられるところ	-0.001	0.169**	0.173**	0.157**	0.067**	-0.016	0.180**	-0.019	0.177**	0.218**
	いっしょに遊んで楽しめる友達が得られるところ	0.027	0.253**	0.275**	0.224**	0.088**	0.052	0.268**	-0.057**	0.170**	0.202**
	いっしょにと居心地がよく安心できる友達が得られるところ	0.103**	0.198**	0.198**	0.306**	0.158**	-0.019	0.238**	0.063**	0.144**	0.232**
有益な情報・アドバイス・援助・刺激などを与えてくれる友達が得られるところ	0.101**	0.183**	0.301**	0.309**	0.170**	0.015	0.241**	0.073**	0.176**	0.282**	
今後長くつき合っていくような友達が得られるところ	0.103**	0.153**	0.177**	0.187**	0.144**	-0.023	0.256**	0.102**	0.233**	0.412**	
学習意欲への ミット	0.072**	0.303**	0.213**	0.319**	0.154**	0.014	0.211**	0.185**	0.185**	0.444**	
自己意識・対他人関係意識	あなたは学校の勉強がどのくらい得意ですか	0.090**	0.219**	0.300**	0.051*	0.014	-0.178**	0.184**	0.141**	0.190**	0.121**
	あなたは、中間・期末テストにおいて、ぶっばいとれたいよを目標として勉強して ますか	0.143**	0.057**	0.155**	0.071**	0.067**	-0.210**	0.133**	0.198**	0.307**	0.159**
	私は他の人になど比べているところがある	0.130**	0.463**	0.786**	0.081**	-0.024	-0.102**	0.240**	0.110**	0.185**	0.589**
	自分が好きである	0.084**	0.747**	0.892**	0.116**	-0.021	-0.055**	0.272**	0.133**	0.216**	0.583**
	私は自分らしく生きていると思う	0.076**	0.633**	0.645**	0.162**	0.040*	-0.011	0.264**	0.040*	0.175**	0.503**
	今のままの自分でよいと感じている	0.010	0.799**	0.668**	0.104**	0.021	0.121**	0.268**	-0.018	0.075**	0.173**
	自分の将来に関して、不安を感じる	0.088**	-0.120**	-0.079**	0.031	0.131**	-0.031	0.007	0.083**	0.079**	0.073**
	まわりの人が笑ったり悩んだりしているも、平気でいられる	0.079**	0.116**	0.128**	-0.179**	-0.202**	0.027	-0.068**	0.098**	-0.044*	-0.208**
	いっしょに働きたりしたいニュースを見聞きする	0.014	0.083**	0.139**	0.251**	0.256**	-0.066**	0.216**	0.027	0.387**	0.248**
	人の役に立てたり人と助け合えたりする、うれしくなる	0.096**	0.131**	0.194**	0.264**	0.252**	-0.070**	0.207**	0.073**	0.388**	0.406**
	友だちと相談しあったり、力を合わせたりして、目標に向かってがんばるのが好き だ	0.053**	0.168**	0.214**	0.235**	-0.066**	0.023	0.235**	0.049*	0.272**	0.517**
	思ったことや悩みごとがあるときに、相談できる人がたくさんいる	0.065**	0.269**	0.273**	0.353**	0.120**	-0.009	0.287**	-0.002	0.287**	0.248**
	誰かにいっしょに聞かされた、誘われたと一緒に行動したりするのは面倒だ	0.060**	0.013	0.017	-0.124**	-0.091**	-0.022	-0.136**	0.056**	-0.051*	-0.266**
	自分が閉まっているときには、だいたい誰かが開けてくれる	0.071**	0.249**	0.266**	0.199**	0.103**	0.015	0.237**	0.021	0.260**	0.510**
	友だちから、いっしょに相談されたり、困ったことを助けたりする	0.078**	0.162**	0.184**	0.167**	0.127**	-0.001	0.246**	-0.015	0.283**	0.695**
	自分の考えははっきり相手に伝えていることができる	0.081**	0.287**	0.248**	0.109**	0.020	0.060	0.281**	0.024	0.163**	0.428**
	友だちが間違ったことをしつら指摘している	0.106**	0.269**	0.296**	0.133**	0.073**	-0.016	0.280**	0.057**	0.296**	0.273**
	嫌いな人・苦手な人とも、うまくつき合う努力をしている	0.048*	0.160**	0.165**	0.195**	0.151**	-0.052*	0.222**	0.035	0.192**	0.207**
	人といっしょに遊ぶより、一人でいるほうが好きだ	0.090**	-0.043*	-0.037	-0.126**	-0.089**	-0.011	-0.191**	0.042*	-0.030	-0.207**
他の人とつながり合っていると感じている	0.085**	0.251**	0.291**	0.254**	0.170**	0.017	0.273**	0.093**	0.249**	0.699**	
自分の問題は、最後は、自分で解決しなければならぬのだと感じている	0.222**	0.095**	0.124**	0.106**	0.110**	-0.088**	0.130**	0.127**	0.160**	0.173**	
必要であれば、やったことのない新しいことにどんどんチャレンジする	0.156**	0.213**	0.275**	0.152**	0.118**	-0.199**	0.207**	0.094**	0.213**	0.533**	
やると決めたときは最後までやりとす	0.110**	0.216**	0.243**	0.149**	0.111**	-0.118**	0.158**	0.016	0.125**	0.197**	
むずかしいこととぶつかった時こそ、がんばるほうだ	0.090**	0.242**	0.278**	0.163**	0.109**	-0.176**	0.200**	0.067**	0.178**	0.266**	
自分の目標実現のためには計画的に行動するほうだ	0.303**	0.150**	0.163**	0.150**	0.100**	-0.024	0.100**	0.099**	0.100**	0.316**	
自分の人生は自分の思いどおりにおこなうことができると思っている	0.088**	0.231**	0.261**	0.110**	0.041*	-0.180**	0.148**	0.011	0.134**	0.181**	
自分の人生は自分の思いどおりにおこなうことができると思っている	0.056**	0.239**	0.247**	0.074**	-0.036	0.020	0.181**	0.017	0.090**	0.206**	
自分の方ではどうすることもできないことがあると感じている	0.146**	-0.010	-0.006	0.029	0.096**	0.038	0.003	0.078**	0.072**	0.036	
何ごとについて他人に負けないようにがんばるほうだ	0.095**	0.229**	0.218**	0.174**	0.118**	-0.151**	0.212**	0.041**	0.156**	0.207**	
自分のほしいものが手に入らなくてと落ち着かない 豊かな生活を送っている	0.140**	0.065**	0.105**	0.005	-0.016	0.150**	-0.010	-0.010	-0.012	0.036	
	0.100**	0.279**	0.291**	0.173**	0.050*	-0.056**	0.440**	0.177**	0.274**	0.241**	

質問項目	能力主義観		自己承認① 自己肯定感		自己承認② セルフ・エス ティーム		存在肯定感		反復関心 意識		コンプラ リ意識		幸福感		学校フクク		家族文化資本		質的な関 連性	
社会観・ 社会規範意識	誰かが困っていたら、どんな小さなことでも、何か助けをするべきだ	0.061**	0.089**	0.105**	0.376**	0.316**	0.002	0.236**	-0.015	0.288**	0.397**									
	他人に迷惑をかけなければ、何をしてもいい	0.127**	0.043*	0.019	-0.128**	-0.157**	0.269**	-0.124**	0.013	-0.130**	-0.109**									
	みんな、自分のことが大切で、他の人のことなど真剣に考えてはいない	0.129**	-0.065**	-0.051*	-0.132**	-0.050**	0.092**	-0.188**	0.013	-0.074**	-0.223**									
	心から信用できる人など、この世にはいない	0.010	-0.129**	-0.130**	-0.310**	-0.078**	0.120**	-0.378**	0.013	-0.087**	-0.268**									
	みんなが幸せになることよりも、今、自分が幸せであることが大切だ	0.152**	0.040*	0.060**	-0.144**	-0.184**	0.170**	-0.150**	-0.010	-0.113**	-0.200**									
	一流といわれる会社に入る、人生の成功者だ	0.318**	0.032	0.036	-0.072**	-0.107**	0.067**	-0.017	0.082**	-0.016	-0.001									
	お金がぐくさんあったほうが幸せに暮らせる	0.285**	-0.031	-0.018	-0.094**	-0.092**	0.143**	-0.105**	-0.025	-0.065**	-0.029									
	成功するためには、努力より運が重要だ	0.060**	0.033	-0.004	-0.096**	-0.065**	0.279**	-0.078**	-0.002	-0.045*	-0.050*									
	仕事には、その仕事にふさわしい能力をもっている人がつくべきだ	0.238**	0.024	0.050*	-0.053**	-0.053**	0.144**	-0.075**	0.090**	0.001	-0.039									
	自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ	0.214**	0.057**	0.114**	0.077**	0.012	-0.028	0.101**	0.143**	0.085**	0.100**									
	自分の能力を磨いてどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ	0.223**	0.040*	0.075**	0.011	-0.100**	0.099**	0.042*	0.036	0.030	0.047*									
	人間の生まれつきの能力にそれほど大きな差はない	0.214**	0.062**	0.081**	0.007	-0.095**	0.044*	0.019	0.043*	0.021	0.054**									
	今の世の中での成功は、その人の実績によって収入や地位が決まる	-0.009	0.168**	0.140**	0.247**	0.180**	0.002	0.180**	-0.125**	0.113**	0.199**									
	豊かな人と貧しい人の差が大きい	0.187**	0.007	0.008	0.098**	0.099**	0.063**	0.031	0.031	0.036	0.016									
	人が貧乏になるのは、その人のせいである	0.003	0.036	0.016	0.287**	0.709**	0.011*	0.068**	-0.095**	0.102**	0.154**									
	理由は何であれ今生活に困っている人には、政府が援助をすべきだ	0.198**	0.079**	0.101**	-0.081**	-0.479**	0.089**	-0.006	0.022	-0.052*	-0.041*									
	福祉サービスを充実させるために、税金を上げることもやむをえない	0.022	0.056**	0.036	0.243**	0.709**	0.065**	0.053**	-0.083**	0.068**	0.132**									
	福祉サービスを充実させるために、税金を上げることもやむをえない	0.115**	0.105**	0.132**	0.132**	0.107**	-0.056**	0.111**	0.095**	0.128**	0.116**									
競争観	競争が弱体化している	0.196**	0.128**	0.219**	0.127**	0.040*	-0.200**	0.190**	0.194**	0.173**	0.164**									
	成績の順位を比べて安心しない、不安になったりする	0.206**	-0.024	0.047*	0.109**	-0.040*	-0.092**	0.148**	0.148**	0.146**										
	受験は他人との競争だ	0.200**	0.019	0.048*	0.078**	0.067**	-0.081**	0.096**	0.109**	0.085**	0.090**									
	競争に勝たなければ目標とするものは得られない	0.222**	0.047*	0.088**	0.001	-0.057**	-0.072**	0.035	0.131**	0.030	0.051*									
	競争の結果を決めるのは、本人の努力だ	0.243**	0.080**	0.139**	0.157**	0.138**	-0.123**	0.160**	0.114**	0.130**	0.214**									
	あくせく競争しても、たいしたものは得られない	-0.038	0.053**	0.009	0.057**	0.065**	0.145**	-0.028	0.071**	0.016	0.023									
	才能の恵まれている人にはかなわない	0.130**	-0.084**	-0.117**	-0.077**	-0.003	0.144**	-0.108**	0.050*	-0.062**	-0.095**									
	中学校まででできる学力の差を縮めることはむずかしい	0.043*	-0.088**	-0.104**	0.027	0.075**	0.125**	-0.082**	-0.165**	-0.042*	-0.020									
	今の世の中での成功するには競争に勝ち続けなければならない	0.209**	-0.039	-0.015	-0.024	-0.011	0.047*	-0.032	0.011	-0.047*	-0.022									
	学歴とは関係なく、努力すれば誰でも世の中での成功ができる	0.062**	0.155**	0.164**	0.269**	0.177**	-0.022	0.148**	-0.065**	0.098**	0.200**									
	職業観	自分のやりがいと仕事をしてやっていたい	0.140**	0.090**	0.141**	0.122**	0.159**	-0.023*	0.118**	0.071**	0.149**	0.180**								
		収入に恵まれないでも自分のやりがいと仕事をしたい	-0.059**	0.128**	0.114**	0.138**	0.171**	0.030	0.110**	0.001	0.099**	0.105**								
		自分のやりがいと仕事が見つからない場合は、働かなくてもいいと思う	-0.080**	0.049*	0.012	-0.031	-0.036	0.184**	-0.075**	-0.066**	-0.009	-0.030								
		自分の方へいかなる仕事につきたい	0.177**	0.136**	0.195**	0.165**	0.180**	-0.039	0.156**	0.066**	0.170**	0.208**								
		仕事を通じて高い収入を得たい	0.269**	0.070**	0.100**	0.001	-0.005	0.061**	0.025	0.062**	-0.018	0.057**								
		仕事を通じて高い地位につきたい	0.234**	0.111**	0.158**	0.020	-0.031	-0.112**	0.158**	0.114**	0.012	0.071**								
		仕事を通じて人から尊敬されるようになりたい	0.155**	0.118**	0.178**	0.172**	0.147**	-0.029	0.126**	0.029	0.108**	0.228**								
		仕事に必要な自分の知識や技術をたえず向上させていきたい	0.184**	0.135**	0.204**	0.142**	0.131**	-0.112**	0.138**	0.114**	0.194**	0.196**								
ひとの役に立つ仕事をしたい		0.055**	0.086**	0.134**	0.273**	0.374**	-0.068**	0.207**	0.042*	0.201**	0.266**									
仕事の本身は得意でもかまわない		-0.067**	0.036	-0.013	0.008	-0.043*	0.188**	-0.042*	-0.098**	-0.046*	-0.019									
仕事は、生活していくのに必要なお金を得る手段だと思う		0.219**	0.041*	0.036	0.044*	0.011	0.084**	0.017	-0.008**	-0.029	0.026									
たとえ私生活を犠牲にしても、仕事に打ち込みたい		0.012	0.040*	0.063**	0.024	-0.002	-0.082**	0.048*	0.007	0.040	0.067**									
あまりがんばらなくて働かず、のんびり暮らしたい		0.003	0.014*	-0.023	-0.039	0.004	0.277**	-0.081**	-0.015	-0.025	-0.070**									
働かずに生活できるなら、働かない		0.051*	-0.056**	-0.096**	-0.075**	-0.038	0.279**	-0.120**	-0.054**	-0.132**	-0.116**									
働けずには、ひととの仕事にたもたらすいろいろな仕事を経験したい		-0.020	0.023	0.040*	0.081**	0.061**	0.112**	-0.024	-0.017	0.009	0.088**									
安定した職業生活をおくりたい		0.210**	0.023	0.013	0.116**	0.147**	-0.006	0.083**	-0.007	0.047*	0.133**									
同じ会社や所で一生働きたい		0.107**	0.072**	0.039	0.133**	0.090**	0.015	0.052*	-0.024	0.009	0.044*									
年齢ではなく仕事の実績によって給料や地位を決めたい		0.269**	0.102**	0.138**	0.032	-0.050*	-0.008	0.051*	0.106**	0.069**	0.088**									
同僚どうしで支えあひながら楽しく仕事をしたい	0.108**	0.088**	0.094**	0.205**	0.263**	0.032	0.168**	0.023	0.132**	0.268**										
仕事をきちんとやっていたほうがいいと思う	0.056**	-0.124**	-0.135**	0.100**	-0.076**	0.180**	-0.039	-0.045**	0.091	-0.011										
職業生活についてはよく考えていない	-0.060**	-0.018	-0.050*	-0.049	-0.058**	0.231**	-0.079**	-0.075**	-0.106**	-0.069**										
人生観（自分の人生で重要なこと）	結婚して幸せな家庭生活をおくること	0.068**	0.111**	0.150**	0.206**	0.105**	0.042*	0.170**	-0.014	0.099**	0.271**									
	お金持ちになること	0.212**	0.003	0.042*	-0.045*	-0.088**	-0.089**	0.025	-0.047*	-0.007										
	仕事で成功すること	0.224**	0.055**	0.108**	0.019	-0.017	0.040*	-0.008	0.042*	0.011	0.063**									
	仕事で人に尊敬されること	0.140**	0.103**	0.159**	0.144**	0.104**	-0.048	0.093**	0.005	0.097**	0.188**									
	親友をもつこと	0.106**	0.077**	0.111**	0.214**	0.210**	0.189**	0.054**	0.132**	0.212**	0.248**									
	人とのつながりが大切になること	0.107**	0.101**	0.134**	0.287**	0.224**	-0.017	0.214**	0.025	0.164**	0.248**									
	広く社会の役に立つこと	0.074**	0.104**	0.161**	0.274**	0.209**	0.161**	0.210**	0.023	0.196**	0.261**									
	身近な人々との役に立つこと	0.093**	0.088**	0.125**	0.278**	0.256**	-0.044*	0.219**	0.061**	0.258**	0.200**									
	世の中のままさまざまな不平等をなくすために社会活動をする事	-0.019	0.075**	0.098**	0.253**	0.279**	-0.034*	0.171**	-0.031	0.166**	0.214**									
	自分の好きなことを楽しむ期間をもつこと	0.139**	0.128**	0.147**	0.062**	0.128**	0.114**	0.065**	0.066**	0.102**	0.153**									
	自分の思いどおりに生きること	0.161**	0.095**	0.107**	-0.042*	-0.057**	-0.125**	-0.015	0.077**	0.007	0.013									
	人並みの生活をふつうに過ごすこと	0.041*	0.004	-0.064**	0.130**	0.169**	0.111**	0.048*	-0.121**	0.028	0.114**									

以下、これら2つの表を参照しつつ、10変数各々やそれら相互の関連が意味するところについて分析・解釈していく。なお、表8の変数には表7の

因子分析・主成分分析の際使用した変数も挙がっており、それらは当該の因子・成分との相関が当然ながら大きい、その数値には基本的には言及しない。

3.3.2 能力主義意識

能力主義意識について、まず表 7 からは、次のようなことが読み取れる。

- (ア) 能力主義意識は、そこに挙がっている変数のうちコンサマトリー意識以外の変数との間に統計的に有意な相関が見られる。ただし、いずれも非常に弱い相関である。
- (イ) だがその中では、セルフ・エスティーム、学校ランクとの相関係数は相対的には大きくなっている。いずれも正の相関であり、それぞれの変数が意味するところから考えて、それは納得のいくところである。つまり、自己の能力・特性・属性などの肯定的な自己評価に基づくセルフ・エスティームの高低や、まさに能力主義原理を土台とした学校の序列秩序の中で自分が占める位置と、優れた能力・業績を価値あるものと見る能力主義への賛否とが相関するのは、確かにあり得ることだろうと合点がいくということである。むしろ、もっと大きな数値になっていないのがなぜかを問題とすべきであるかもしれない。
- (ウ) 存在肯定意識との間には統計的に有意な正の相関が、反貧困・反格差意識との間には統計的に有意な負の相関が見られるが、いずれもごく小さい値であることも注目しておくべき点であろう。論理的に突き詰めて考えれば、能力主義と存在肯定や反貧困・反格差とは背反する性格を帯びているものだが、高校生の意識の中では両者は少なくとも明瞭に背反するものではなく、むしろ併存しているということなのであろう。このことは、図 1 に挙がっている社会観・社会規範意識関連の 20 項目の中で、存在肯定意識や反貧困・反格差意識と関連が深い質問項目のうち、特に「豊かな人と貧しい人の差が大きすぎるのは良くない」「人間は、生きてい

ることだけで十分価値がある」の2項目は、それぞれ2番目・6番目にその肯定度が高くなっていることとも整合していると言えるだろう。

次に表8だが、この表に関しても、能力主義意識は、多くの項目と統計的に有意な正の相関が見られるが、その絶対値はほとんどが非常に小さい。ただ、その中でも比較的大きな値となっている質問項目に注目して気づかれることの中から、特に次の2点を取り上げておきたい。

(エ) 能力主義意識成分は、競争観質問群のいくつかの項目との間にやや大きな相関が見られるが、それは、2.1で述べたように能力主義は競争過程の展開につながるものであり、したがって能力主義を肯定することは競争を肯定することへと結びついているということの意味していると言えるであろう。ただし、その競争の肯定は、競争を理念的に良きものとして捉えるというよりは、競争が存在することを是認し前提視しているというニュアンスが強いのかもしれない。

(オ) 能力主義意識成分は、社会観・社会規範意識質問群の「一流といわれる会社に入ると、人生の成功者だ」「お金がたくさんあったほうが幸せに暮らせる」、職業観質問群の「仕事を通じて高い収入を得たい」「仕事を通じて高い地位につきたい」、人生観質問群の「お金持ちになること」「仕事で成功すること」との相関がやや大きくなっている。そのことは、能力主義意識は、これらの質問への回答から推測されるいわば世俗的な成功志向とでも言えるようなものと結びついていることを意味していると言っていだろう。

(カ) 能力主義意識成分は、同じく社会観・社会規範意識質問群の「今の世の中では、その人の実績によって収入や地位が決まる」と見ることとの間にごく弱いが正の相関があり、現状の社会が能力主義の理念通りになっていると見ることに繋がっている。また、「人が貧乏になるのは、その人のせいである」との間にごく弱いが正の相関が見られる。(ウ)に述べたことにもかわらず、能力主義意識には、貧困・格差の原因を当人の自

己責任と見る傾向が伴っていることがうかがわれる。(ウ)で述べたことも合わせて、能力主義を肯定する意識は、緩やかにではあるが、既存社会秩序の正統性を承認する傾向へとつながっているとと言えるだろう。

(キ) 能力主義意識成分は、同じく社会観・社会規範意識質問群の「チャンスや運に恵まれて実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ」との相関もやや大きい。それは、能力主義を肯定する意識が、能力や努力によるばかりでなく、ある意味でそれとは相反するとも言える「チャンスや運」によるものも含め、その個人が生み出した実績と見なされるものによる価値配分を肯定する意識であるという性格を帯びたものであることを意味していると言えるだろう。

(ク) 能力主義意識成分は、社会観・社会規範意識質問群ではさらに、「仕事には、その仕事にふさわしい能力をもっている人がつくべきだ」との相関がやや大きくなっている。それは、この質問項目が能力主義の第3の側面である地位の配分原理としての能力主義（2.1参照）を表わすものであるからであろう。ただし、能力主義の他の2側面を表わすものも含めた3つの質問項目間の相関係数の大きさから判断すると（表9参照）、2.1で述べたように、財の配分原理や人の価値に関する基準であることが、能力主義のより中心的な性格であり、適材適所の地位配分原理はそれと比べると派生的であるという見方が妥当であると考えていいだろう。

表9 能力主義3項目間の相関分析

	自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ	自分の能力を発揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ	仕事には、その仕事にふさわしい能力をもっている人がつくべきだ
自分の能力と努力によって実績を上げた人が高い収入や地位を得られるのは、良いことだ		0.325**	0.289**
自分の能力を発揮してどれだけの実績を上げたかによってその人の価値が判断されるのは、良いことだ	0.325**		0.243**
仕事には、その仕事にふさわしい能力をもっている人がつくべきだ	0.289**	0.243**	

3.3.3 自己承認

自己承認について、次のようなことが読み取れる。

- (ア) 3.2.2 で述べたように、自己承認に関わる2つの因子、自己肯定感とセルフ・エスティームの間の相関はかなり強いので、表7、表8いずれを見ても、両者各々と他の変数との相関はおおよそ似た様子になっている。
- (イ) 両者に共通するところで注目しておくべきこととして、まず表7で、両因子ともに幸福感との間にやや強い正の相関が見られる点が挙げられる。自己承認の意識と幸福感との相関が大きいというのは納得できるところだろう。また、ケア的な関係性との間にもやや強い正の相関が見られる。自己承認がケア的な関係性に支えられて可能になっていることが推測される。
- (ウ) やはり表7からわかることとして、両因子とも、能力主義意識成分との相関は統計的に有意な正の相関となっているが、その値はごく小さいということが挙げられる。つまり、自己承認でき肯定的な自己意識をもてるということと、2.2 で言及した、現代社会における承認原理の1つである能力主義への肯定との関連は、少なくとも明瞭な形では見られないと言っていいたいだろう。なお、2つの因子の間でこの点について見られるわずかの差異についても、(オ) で言及する。
- (エ) 自己承認でき肯定的な自己意識をもてることを拠点として、社会に対する批判意識をもつということも、はっきりとは見られない。それは、表7で自己承認の両因子とも反貧困・反格差成分との間に有意な相関が見られない点などに示されている。とは言え、両因子とも、存在肯定意識との間にはごく弱い正の相関が見られる。それもまた、社会に対する批判意識へとつながるし、それそのものであるとも言える。
- (オ) 両因子の違い（前述のようにわずかな差であることがほとんどだが）の中で注目しておくべきことは、1つに、表7で、第1因子の自己肯定感のほうが第2因子のセルフ・エスティームより、わずかだが、能力主義意

識との相関が小さく、存在肯定意識との相関が大きくなっていることである。ここには、自己への肯定的意識である点では同じあっても、自己肯定感と第2因子のセルフ・エスティームの性格の違い（3.2.2 で見たような違い）が多少とも表れていると言えるだろう。

- (カ) 同じく表7で、自己承認の第2因子は、コンサマトリー意識との間にわずかだが統計的には有意な負の相関を示している（第1因子とコンサマトリー意識の相関は統計的に有意ではない）。また、表8では、自己意識・対他関係意識質問群の「必要があれば、やったことがない新しいことにもチャレンジする」、「自分の目標実現のために計画的に行動するほうだ」、「何ごとにつけ他人に負けないようにがんばるほうだ」、競争観質問群の「競争は勉強の励みになる」、職業観質問群の「仕事に必要な自分の知識や技術をたえず向上させていきたい」などの項目で、第2因子のほうが第1因子よりも、相関係数がより大きな正の値となっている。これらの点にも、(オ)に触れたのと同様の自己肯定感とセルフ・エスティームの性格の違いが表れているものと思われる。
- (キ) 表7で、学校ランク、家族文化資本との正の相関が、第1因子より第2因子で大きくなっている。セルフ・エスティームは、既存社会の価値尺度に照らして肯定的に捉えられる自己の特性に依拠した自己肯定の意識であることが表れていると言えるだろう。
- (ク) 表8に示されている諸項目のうち、自己承認に関する4項目と(カ)で言及した項目以外に、両因子との相関係数の値の差が大きい項目として、「成績の順位を比べて安心したり、不安になったりする」（競争観質問群）、「人並みの生活をふつうに過ごすこと」（人生観質問群）が注目しておくべきだろう。相関係数はどちらも正の値だが、前者では、第1因子が第2因子に比べて値が小さく、後者では、第1因子が大きい。つまり自己肯定感には、自分が直面している事態をそのまま受け入れ、そこにかがえる良い悪いいずれの兆候にもあまり動じないというスタンスが結びつい

ていると解釈できるだろう。

- (ク)表8より、自己承認の2因子はどちらも、「学校に行くのが楽しみだ」などのように良好な学校体験との間に正の相関が見られる。学校が肯定的な感覚でもって受けとめることができる場であることは、自己承認を支える条件の1つとなっているということなのであろう。この正の相関が第2因子のほうでより強く見られるのは、(キ)で述べたのと同じ理由によるものと思われる。

3.3.4 存在肯定意識、反貧困・反格差意識

- (ア)まず、表7より、存在肯定意識、反貧困・反格差意識の間には、正の相関が見られることがわかる。貧困や格差は人の存在を脅かすものであるゆえ、存在そのものを肯定することは貧困・格差状況への批判的見方につながるの当然と言えは当然であらう。

- (イ)同じく表7より、存在肯定意識は、幸福感やケア的な関係性との間に弱い正の相関が見られる。加えて、家族文化資本との間にも、さらに弱いがやはり正の相関が見られる。良好な状況・環境の中に置かれ、良好な暮らしをおくることができていることが、人間の存在を全般的に肯定するこの意識の支えになっているということであらう。特に、存在肯定の意識とは論理的には、家族文化資本による階層序列構造を否定する意識であらうが、自身の境遇におけるその豊富さと正の相関を示すことは、しばしば見られることであるとは言え、注目しておくべきだろう。なお、反貧困・反格差意識も、幸福感、ケア的な関係性、家族文化資本との間に正の相関が見られるが、存在肯定意識の場合に比べてそれらとの間の相関係数の値は小さく、ごく弱いものとなっている。

- (ウ)表8からは、「ひとの役に立つ仕事をしたい」(職業観質問群)、「広く社会の役に立つこと」(人生観質問群)などとの間に、存在肯定意識、反貧困・反格差意識いずれも正の相関が見られる。社会的貢献志向とも呼べる

ようなものが、両者に伴っているということであろう。さらに、「世の中のさまざまな不平等をなくすために社会活動をする事」（人生観質問群）とも、いずれも相関が見られ、その社会的貢献には社会の作り変えのための活動へのコミットメントの意味合いも伴っていることが推測される。

- (エ) 表 8 から、存在肯定意識は、学校の主観的レリバンス質問群のかなり多くの項目との間に弱い相関が見られる。レリバンスを感じられるような場として学校を感じられることが、存在肯定の意識に何らかの回路でつながっているということなのであろう（表 7 に見られるように、学校ランクとの間にはむしろ負の相関が見られるので、それ以外の回路で）。

3.3.5 コンサマトリー意識

- (ア) 表 7 より、コンサマトリー意識は他のいずれの変数との間の相関もごく弱いものであることがわかる。ただしその中では、学校ランク、家族文化資本との間で相対的には強い負の相関が見られる。つまり、どちらかかという、低いランクの学校において、また文化資本に恵まれない家族において生じやすい傾向がある意識であるということである。
- (イ) 表 7 にて、コンサマトリー意識と能力主義意識との間の相関係数は、統計的に有意でないことが示されている。またコンサマトリー意識は、幸福感との間にはごく弱い統計的には有意な負の相関を示している。2.4 で述べたような、コンサマトリー化が能力主義への批判につながっている、またコンサマトリー化が幸福感の強まりをもたらす一因であるという仮説は、この調査のデータからは検証されないということである。
- (ウ) 表 8 に挙がっている項目の中で、コンサマトリー意識との相関係数の絶対値が大きい順に 5 項目挙げてみると、「あなたは、中間・期末テストにむけて、ふつうはどれくらいを目標として勉強していますか」（負の相関。学業成績へのコミットメント質問群。この変数の回答選択肢と処理の仕方については、3.3.1 参照）、「働かずに生活できるなら、働きたくない」（職

業観質問群)、「あまりがんばって働かず、のんびりくらしたい」(同上)、「成功するためには、努力より運が重要だ」(社会観・社会規範意識質問群)、「他人に迷惑をかけなければ、何をしてもいい」(同上)となる。これらよりコンサマトリー意識には、既存の正統な価値基準を前提にしつつ生真面目に努力しようとするのと真逆の志向性が伴っていると言っていいかもしれない。

3.3.6 幸福感

(ア) 表7より、**3.3.3**でも述べた点だが、幸福感は自己承認の2つの因子との間にやや強い正の相関を示している。自分自身のことを承認できるということは、幸福感の重要要素の1つということなのであろう。

(イ) ただし、ケア的な関係性との相関のほうが、自己承認の2因子以上に強くなっている。家族文化資本との間にも、自己承認やケア的な関係性よりは弱い正の相関が見られ、ごく弱い学校ランクとの間にもやはり正の相関が見られる。言うまでもないが、それは、幸福感は良好な状況・環境によって支えられる傾向を帯びた意識であるということの意味していると考えていいだろう。

(ウ) 幸福感は、存在肯定意識とも、弱い、しかし自己承認2因子と存在肯定意識の相関よりは大きな正の相関が見られる。だが、反貧困・反格差意識との相関は、統計的に有意な正の値とはなっているが、ごく弱い。表8に挙がっている「世の中のさまざまな不平等をなくすために社会活動すること」(人生観)との相関も、存在肯定意識及び反貧困・反格差意識のその変数との相関に比べてかなり小さい。幸福感は、存在肯定意識という理念レベルのことがらとしてのみ受けとめられやすいものとの間に正の相関を示していたとしても、それに比べると、貧困・格差という今日の社会におけるより現実的な問題に対する批判意識とは結びつきづらいいということなのかもしれない。

(オ) 表 8 より、幸福感は、**3.3.3(ケ)** で見た自己承認の 2 つの因子の場合以上に、良き学校体験との正の相関が大きくなっていることがわかる。加えて、**3.3.4(エ)** で見た存在肯定意識の場合よりもやや強く、学校の主観的レバランスの諸項目との間にも正の相関が見られる。幸福感を抱けるかどうかは、学校という場がその人にとってどのような場であるかが、その学校のランクということにとどまらず重要であるということなのであろう。

学校ランク、家族文化資本、親密な関係性は、ここまでの 7 つの意識変数の検討の中で既に言及してきたので、それ独自の項を立ててそれ以上の分析を行うことは省略する。

4 結論と今後の課題

2 で提示した視点に基づき、3 では若者の意識の分析を行った。4 ではその分析の結論に当たることをまとめ、今後の課題を若干述べておきたい。

(7) 能力主義意識は、調査対象となった 2007 年の高校生たちにも広く浸透した意識であると言える (**3.2.1** 参照)。能力主義意識は、既存の価値基準に沿った成功志向、現在の社会を能力主義の理念通りに動いているものと見ること、貧困・格差の原因を当人の自己責任と見ることなどと結びついており (**3.3.2(カ)** 参照)、したがってそれらの点では、能力主義が、人びとに既存の社会秩序を正統視させ、かれらをそこへ統合する機能 (**2.1** 参照) を果たす傾向性があるということが、調査対象となった高校生について当てはまっていると言えるだろう。ただ、能力主義意識は、存在肯定意識や反貧困・反格差意識とくっきりと背反しているということはなく (**3.3.2(ウ)** 参照)、上記の能力主義の正統化や統合の機能が強力に発揮されているとまでは言えない。

(イ)**2.2** にて言及した自己への肯定的意識と能力主義への肯定との間の正の相関関係は、データではほとんど検証されなかった (**3.3.3(ウ)** 参照)。調査

対象者にとって、自己承認し肯定的な自己意識をもつ上で、能力主義が強力な承認原理となっているということは、少なくとも明瞭には検証されなかったと言えるだろう（同上参照）。

- (ウ) 自己承認、それに伴う自己肯定の意識には、自己肯定感、セルフ・エスティームという二側面があるという仮説（3.2.2参照）に基づいて考察を進めたが、おおよそ仮説通りの二側面がデータからも浮かび上がったと言っていいだろう。つまり、セルフ・エスティームがある価値尺度を設定しそれに照らして肯定的に捉えられる自己の特性に依拠した自己肯定の意識であるのに対して、自己肯定感には価値尺度に準拠した自己肯定という点がセルフ・エスティームほどには見られず、自己の存在それ自体を肯定するという性格を帯びているという二側面である（3.3.3(ウ)～(ク)参照）。

高垣(2015: 142-145, 29-30)は、人間には「社会的存在」「宇宙的存在」の両側面があり、これら2つを中心とする楕円のように人間の生は成り立っていると言う。社会的存在とは、他者と社会関係を取り結びながら社会の価値基準を参照しつつ生きる人間存在の側面であり、宇宙的存在とは、特定の社会の枠組みを超えて、過去から未来へと変転しつつ存在し続ける万物の連なりの中にある「いのち」という側面である。その上で、セルフ・エスティームとは、社会的存在としての人間が社会的尺度による他者からの評価を元にして自己に対して抱く肯定的な感覚であり、自己肯定感とは社会的尺度によるのではなく宇宙的存在のレベルで他者から肯定されることを通じてつくり上げられる自己に対する肯定的感覚である——高垣はこのような趣旨のことを述べていると、筆者は読み取った。自己肯定感と関連する人間の生の側面を高垣の言うような宇宙的存在として考えることの妥当性は、筆者は今のところ判断を保留するが、それ以外の点ではおおよそ賛同できる。

このような高垣の見解の基づくならば、楕円の中心という喩えを用い

て示唆されているように、セルフ・エスティームと自己肯定感は、いずれも不可欠でありどちらかに還元不可能な自己意識の両側面ということになる。そうだとすると、**3.2.2** で触れた両者の相関係数の大きさ、両因子の因子寄与率の差異の大きさなどの指標から考えても、また **3.3** での分析の中で見られた数値から考えても、今回の分析では、自己承認、自己肯定の二側面性の差異とその上での関連があまり鮮明に浮かび上がったという感じはしない。だが上で見たようなことからの性質から考えて、ほんとうはもう少しくっきりと、両者の差異とその上での関連が浮かび上がるはずなのではないか。今後行う予定の調査では、質問紙での質問内容を再考し、これらの点が鮮明になるように工夫をしてみたいと考えている¹。

- (エ) 存在肯定意識、反貧困・反格差意識の間には正の相関が見られ、両者いずれも、社会をつくり変えるための活動へのコミットメントを含む社会的貢献志向が伴っている (**3.3.4** 参照)。ただし、(ア) でも確認したように、能力主義意識とはほとんど無関連であり、既存社会に対するそれらの批判意識は、能力主義には必ずしも向けられてはいない。
- (オ) **2.4** では、コンサマトリー化が能力主義への批判につながっている、またコンサマトリー化が幸福感の強まりをもたらす一因であるという仮説を示したが、コンサマトリー意識と能力主義意識とは無関連であり、またコンサマトリー意識と幸福感との間にはむしろごく弱い負の相関が見られ、今回分析したデータでは上の仮説は検証されなかった。データからは、コンサマトリー意識には、既存の正統な価値基準を前提にしつつ生真面

¹ 本稿の **2.2** で触れたように、ホネットは承認とは個人や集団の積極的な特性を肯定することだという。しかしこのような捉え方をすると、承認とは社会的尺度に基づいて他者を肯定的評価することだという把握にとどまり、それによってつくり上げられる自己承認の意識もセルフ・エスティーム的なものに限定されてしまう。ホネットの議論の中にも、高垣が言う意味での自己肯定感に関連する論脈が存在しているはずなので、その点が明瞭に浮かび上がるようにホネットの議論を組み換える形で、承認の原理論を提起する理論的作業も行いたいと考えている。

目に努力し生きることへの拒絶の意思が伴っていることがうかがわれた(同上)が、それが存在肯定意識、反貧困・反格差意識に結びつくなどの形で、既存の支配的な価値への挑みにつながるというようなことは見られなかった(3.3.5参照)。

- (カ) ケアの関係性は、幸福感、セルフ・エスティーム、自己肯定感、存在肯定意識との間に正の相関が見られた(それら各変数との相関係数の値は、それらが並んでいる順に大きい)。ケアの関係性は、基本的に望ましいものと言っていいであろうそれらの意識を支える重要性な要因となっているということである。なお、家族文化資本も、それらの意識との間に正の相関を示しているが、その値はケア的な関係性に比べてだいぶ小さい。また、学校ランクは、さらに小さい値であり、存在肯定意識の間ではごく弱いが統計的には有意な負の相関となっている。

ケア的な関係性に戻るが、それは反貧困・反格差意識の間にも正の相関を見せているが、上記四変数に比べるとその値はかなり小さい。また、能力主義意識の間には、ごく小さいが正の相関が見られる。本稿で使用した質問から浮かび上がる限りのケア的な関係性は、それらの点での批判的な意識を伴うものではないということである。

- (キ) 自己承認の意識、存在肯定意識、幸福感は、良好な学校体験、学校の主観的レリバンスの感覚のいずれか、あるいはそれら両方との間に正の相関が見られた(3.3.3(ケ)、3.3.4(エ)、3.3.6(オ)参照)。学校が居心地良く、有意義であると実感できることは、それらの意識が培われる重要な要因であるということである。

2で提示した視点に基づく、2007年の高校生の意識調査データの分析の結論は、以上ようになる。本稿で提示した視点から今日の若者の意識の在りようがいつそう鮮明に掴めるように、本稿で使用したデータとの経年比較のための連続性を維持することに留意しつつも、(リ)で触れた点についてだけでなく全体にわたって質問の練り直しにまずは取り組みたい。

参考文献

- 高垣忠一郎 (2015)『生きづらい時代と自己肯定感 「自分が自分であって大丈夫」って?』新日本出版社
- 立岩真也 (1997=2013)『私的所有論 [第2版]』勁草書房
- 立岩真也 (2003)「少しややこしく能力主義を考える (1)～(3)」国民教育文化総合研究所『季刊 forum 教育と文化』31、32、33
- 豊泉周治 (2010)『若者のための社会学 希望の足場をかける』はるか書房
- 豊泉周治 (2016a)「若者の現在とコンサマトリーな民主主義」『教育』5月号
- 豊泉周治 (2016b)「若者のコンサマトリー化と民主主義の再創造」『唯物論研究年誌』第21号
- 長谷川裕 (2008)『教育における能力主義の原理と新自由主義時代におけるその実態 理論的及び実証的研究 (課題番号 17530616)』2005年度 - 2007年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書
- 長谷川裕 (2017)「中内敏夫における子ども・若者の「現在主義」の把握と位置づけ」『教育目標・評価学会紀要』第27号
- 長谷川裕 (2020)「戦後日本の学校の支配・統合機能とその転換 規律・訓練、象徴闘争、承認」『教育』5月号
- ホネット、A. (1992=2003)『承認をめぐる闘争 社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局
- ホネット、A. (2000=2005)『正義の他者 実践哲学論集』法政大学出版局
- ホネット、A. (2010=2017)『私たちのなかの私 承認論研究』法政大学出版局